

「青年文化会議」の設立と内田義彦

The Foundation of *Seinen Bunka Kaigi* and Yoshihiko Uchida

竹 本 洋

The *Seinen Bunka Kaigi*, established in 1946, was a group of young scholars and artists below the age of forty. Yoshihiko Uchida(1913-89), historian of economics, participated in it as one of the active members and started to enlighten the public as to freedom and democracy.

Hiroshi Takemoto

JEL : B31

Key words : *Seinen Bunka Kaigi*, enlightenment

はじめに

内田義彦(1913-89)は、長年勤務した大学での最終講義において、みずからの学風を顧みて、「一風変わった経済学史」であったと述懐した。「一風変わった」には、オーソドックスな経済学史研究からいくぶん逸れたという謙遜とともに、他の追随や模倣を許さない唯一者の矜持も感じられる。内田はスミスやマルクスの研究を「本業」としながらも、学問論や読書論や文学論、はてはレトリック論などにもおよぶエッセイの執筆に少なからぬエネルギーを注ぎ、さらには演劇、音楽、教育、医療など多彩なテーマの対談に、半ば楽しみながら——と私にはみえる——時間を割くことを惜しまなかった。¹⁾ 文明批評的な色合いをもつこれらのエッセイや対談によって、学界という狭い世界を越えて広い読者層に恵まれ、ファンともいえる支持者を獲得したのである。死の3か

1) 内田義彦「考えてきたこと、考えること」『専修大学社会科学研究所月報』235号、1983年2月、『内田義彦著作集』第1巻、岩波書店、1988年収録、304ページ。

月前には、そのエッセイ群を自分の「学問の根幹に触れるもの」といい、また対談の数々をエッセイよりも「もっと私の学問の本質を表わしている」ものとまで言い切ったのである²⁾。エッセイは「学問を自分なりに進めるには不可欠のもの」であるとされているから³⁾、内田にとってのエッセイは、自身の学問のエンジンでもありフレームでもあるような独自の思想領域を表現するものであり、対談はその思想を他人と直接交流する場であった。

このように経済学史研究者と文明批評的思想家との二足の草鞋を履き、世人にはむしろ後者が本業と受けとめられかねない一風変わった独特のスタイルは、最初から内田の目指したものではなかった。敗戦を内地で迎えた内田は、戦後の自分の進路に悩み、文明評論家と経済学者のいずれになるべきか、ハムレットの心境であったらしい。らしいというのは、内田はそのことを直接に語っておらず、敗戦の年の 11 月 17 日付の野間宏から内田への手紙によって、それを灰聞しうるだけだからである。

昨日高安の家を訪ね、君の例の問題（経済学者か文明評論家か）を出しましたが、高安もそれはやってみなければ判らないと言いながら、君の文明評論家としての生き方に於いても君が生き得ることを言っていました。僕は、君の姿や君の歩きぶりから、君の本質を文明評論家として捉えているように思います。〔旧仮名づかいを新仮名づかいに変更。以下の引用でも同様〕⁴⁾

冒頭に出てくる高安は、旧制甲南高校尋常科以来の内田の友人で、独文学者でアララギの歌人でもあった高安国世のことである。経済学者と文明評論家のどちらの道に進むべきか、その悩みを内田は野間に相談し、野間はその相談事を高安にも伝えたのである。高安は「やってみなければ判らない」と言う一方で軽々なアドバイスを避けながらも、内田に文明評論家としての可能性を認めた。他方、野間は高安よりも積極的に、内田の資質が文明評論家向きだと

2) 『内田義彦著作集』第 7 巻、1989 年の「後記」611 ページ。この後記は 1988 年 12 月 7 日の日付がうたれている。内田の死は 1989 年 3 月 19 日のことである。

3) 内田義彦『学問への散策』岩波書店、1974 年、『内田義彦著作集』第 6 巻、1988 年に収録、311 ページ。

4) 野沢敏治・酒井進編『時代と学問－内田義彦著作集補巻－』岩波書店、2002 年、409-10 ページ。

し、さらに「君は文明評論家して、芸術認識と科学認識の流通の場を、何時か明らかにしてくれるでしょう」と暖かい言葉をかけたのである。⁵⁾

文明評論家か経済学者かという進路選択は、いいかえれば、在野の評論家(思想家)として筆一本で生きるのか、大学に席を求めて専門研究者となるのかの選択である。そうしたなかで、内田が名乗った戦後最初の肩書きは「経済評論家」であった。これは文明評論家と経済学者とを折衷したかのような呼称で、進路を決しかねている宙ぶりの気持があらわれている。⁶⁾しかし経済評論は、野間の期待した芸術と科学とを「流通させる場」を開拓するような創造的な仕事からは懸け離れていた。内田は次第に、「人間の問題をほんとうに解決するためには、いろいろの問題を経済学の領域にひきしばってゆかなければならない」と考えるにいたり、ついに「経済学を専攻することに決めた」のである。⁷⁾こうしてこの年の10月には専修大学助教授に就任し、在野の評論家時代は半年余りで終わりを告げたのである。そのことが直ちに研究に専念する道へとつながらなかったところが、内田の内田らしいところで、そこに一風変わった学風と生き方との素地がつくられることになった。

内田が経済評論家として初名乗りをあげた舞台は、1946年2月2日に設立宣言をした「青年文化会議」(以下「会議」と略称する場合がある)である。内田はこの文化啓蒙団体に、設立の準備過程からその消滅にいたるまで中心的会員として参画した。これ以降、花田清輝、野間宏、中村真一郎、加藤周一らがつくった「総合文化協会」に下村正夫、瓜生忠夫、青山敏夫らとともに加わり、

5) 同、410ページ。もっともそこは野間らしく、文明評論家に必要な条件を挙げて、いまの内田に欠けているものを指摘している。一つは、内田の言葉に「もっと豊富なメタファー」が加わること、二つには、「フランスの精神(形の精神)」を通過すること、三つにはバルザックとアランと、そして「デカタンの真の精神」を通ることである。この野間の注文に後年の内田が良くこたえたかどうかは一考に値する。

6) 文明評論家とは一体何者なのか、また内田はこの看板で、どのような生き方を目指そうとしたのか、かならずしも明らかではない。なお青年文化会議に内田と同様に運営委員として参加した杉浦明平の肩書きは文明評論家であった。また雑誌『光』の1947年11月号の「新世代論—三十代座談会—」に加わった花田清輝、杉浦明平は文明批評家を名乗っていた。古くは大正デモクラシーの担い手の一人である土田杏村も文明評論家といわれていたから、論壇には文明評論というジャンルが比較的早くから(福沢諭吉以来?)あったのかもしれない。

7) 内田義彦『経済学の生誕』未来社、1953年、『内田義彦著作集』第1巻、1988年、297ページ。

また雑誌『潮流』の共同研究「日本ファシズムとその抵抗線」への参加、さらには雑誌『未来』の編集同人、民主主義科学者協会（民科）の幹事と評議員を務めるなど、1950年頃まで各種の社会的活動に積極的に参加することになる。さきに紹介したように、内田はエッセイや対談をみずからの学問の根幹に触れるもの、その本質を表すものと自認していたが、敗戦から5年ほどの旺盛な社会的活動も、それらに劣らず、内田の学問あるいは思想の根幹に触れるものであった。それを青年文化会議の活動を跡づけることによって確認してみたい。

I. 青年文化会議の結成準備

1944年の10月から休刊していた『思想』が、終戦直後の1945年9月に復刊をはたしたのを皮切りに、翌46年の1月には『改造』、『中央公論』が復刊し、同月にはあらたに『世界』、『展望』などの総合雑誌が創刊されるとともに、45年から46年にかけて多くの評論誌、文芸誌等が創刊され、そこには戦前からの大家といわれる人たちが健筆を振るい始めた。そうしたなかで知識人や文化人といわれる人たちの団体もあいついで結成された。新居格・辰野隆・正宗白鳥・村岡花子・山田耕筰・山本実彦らは、いちはやく1945年9月に「日本文化人連盟」の発起人会を開き、11月には会を正式に発足させるにいった。同年10月には芦田均、安倍磯雄、賀川豊彦らが「自由懇話会」を、またこの同じ月に『世界』の創刊の母胎となる「同心会」が、安倍能成、梅原龍三郎、大内兵衛、志賀直哉、田中耕太郎、山本有三、和辻哲郎ら、オールド・リベラリストと呼ばれることになる人々によって結成された。その他にも、風早八十二・田辺元・津田左右吉・美濃部達吉・森戸辰男・蛭山政道・山川均・宇野浩二・里見淳・広津和郎・武者小路実篤らが——ある者は装いをあらためて——論壇や文壇に返り咲いてきた。

こうした大家たちの再登場に飽き足らない思いと反感とを抱いていた、まだ無名に近い若い世代の「知識人」たちが、45年10月初旬に、専門分野をまたぐ文化組織の結成について下相談を始めた。その口火を切ったのは東京大学の一角に本拠をおいていた『大学新聞』の関係者であった。『大学新聞』は、東京大学の学生新聞であった『帝国大学新聞』が戦争末期の1944年5月に休刊

した後を受けて、同年7月から発刊された全国の大学新聞の統合紙で、戦後の1946年4月まで発行を続けた。その後46年5月には『帝国大学新聞』が復刊したものの（47年10月からは『東京大学新聞』と改題）、48年12月にはそれも休刊に至った。したがって44年から46年まで発行された『大学新聞』は、東京大学のみでなく、その編集室が東大構内におかれていたため、おのずから「東大の言論人」のたまり場となっていた。編集長は、戦時中の瓜生忠夫、櫻井恒次の後を継いで、当時は長谷川泉で、櫻井と瓜生はその頃はそれぞれ大学新聞社の常務理事と嘱託であった。学生時代に扇谷正造、岡倉古志朗、杉浦明平らと『帝国大学新聞』の編集部員として働いた経験のある花森安治や当時『暗い絵』を執筆中であった野間宏も『大学新聞』の社員として働いていたから、かれらも新聞社の関係者であった。⁸⁾ その新聞社に台北大学教授をしていた中村哲や内田義彦ら浪々の身の者がしばしば顔を出していた。瓜生の言によれば、大学新聞社にたむろするこうした人々のあいだから、誰いともなく「自然発生的に」青年文化会議を作ろうというのが話もちあがった。⁹⁾ その経緯は、会議の機関誌『文化会議』第1号の「文化会議通信欄」に簡単に記されている。

〔1945年〕10月初旬、中村哲、瓜生忠夫、櫻井恒次、内田義彦、嘉門安雄君らを中心に「文化会議」設立の下相談なり。中旬より各部門の青年文化人に呼びかけその組織化を計り、11月初旬より会の性格、趣旨、会員の選定、具体的計画等に就いて3回に亘り会員の参集を得て討議し、11月中に大体の方向を決定、爾後会員の獲得に努力す。¹⁰⁾

- 8) 飯田泰三「中村哲の生涯と学問」『戦後精神の光芒－丸山眞男と藤田省三を読むために－』みすず書房、2006年、91ページ。
- 9) 瓜生忠夫『放送産業－その日本における発展の特異性－』法政大学出版社、1965年、6ページ。野間宏「私のゼロ時代」『野間宏作品集9』岩波書店、1988年、98ページ。中村によれば、中村、瓜生、櫻井、野間で最初に会議結成の話合いがなされたという（中村哲「丸山君の戦中・戦後の日々」『丸山眞男集』第14巻、岩波書店、「月報」14、1996年10月、4ページ）。
- 10) 『文化会議』第1号、1946年1月20日、71ページ。なお、1月20日は表紙に書かれた日付、奥付では「1月20日印刷、1月25日納本」とある。なお私の閲覧した『文化会議』は、法政大学沖縄文化研究所・中村哲文庫のものである。同研究所の厚意に記して感謝する。これとは別に、昭和21年2月5日印刷、同2月8日納本の奥付をもつ「会員名簿」が発行されたようだが、中村文庫には見つからないとのことである。瓜生によれば、かれが手書きで増補した分を含めて65名近くの会員が載っていたという（瓜生、前掲『放送産業』17ページ）。

内田は、会議の準備人というべき上の 5 人のなかの 1 人として、設立の下相談の段階から関与し、11 月中まで会議の「性格、趣旨、会員の選定、具体的計画等」の策定に力を注いでいたのである。他方で、ちょうどこの頃は前にも述べたように、文明評論家か経済学者かという進路問題に悩んでいた。学生時代からマルクス経済学に親しみ、戦時中に勤務した東亜研究所や東大の世界経済研究室でも経済畑を歩んできた内田にとって、経済学者を志向することは自然な流れであった。そこに文明評論家への志望が芽生えてきたのは、青年文化会議の設立準備に係るようになってのことか、それとも文明評論家の道を意識し始めたことが会議の準備に力を傾注することになったのかは、今となってはつまびらかにしえないが、『大学新聞』関係者を中心とする会議への参画が、内田の戦後の言論活動の機縁を作ったことはほぼ間違いない。内田の戦後第一声である「新聞と民主主義」が、会議準備中の 45 年 11 月 11 日発行の『大学新聞』（第 40 号）に掲載され、その後も同紙への内田の寄稿が以下のように続いたことが、それを傍証している。同年 12 月 1 日の「食糧問題とその掘り下げ」（第 46 号）、年を越して 46 年 2 月 1 日の「“神話”の克服へ——民衆の一員としての自覚と自信——」（第 50 号）、4 月 1 日の「生活力の欠如」（第 56 号）。さらに名を改めた『帝国大学新聞』にも寄稿が続き、5 月 1 日発行の「“魔術”からの解放——文化闘争の本質と任務（一）——」（第 984 号）、5 月 21 日の「〔書評〕レーニン『国家と革命』」（第 986 号）、9 月 10 日の「ナロードニキとマルクス主義——レーニン理論成立の一挿話——」（第 996 号）、そして 12 月 11 日の「〔書評〕『ソ同盟共産党史』」（1008 号）と、45 年末から 46 年末までの 1 年間は、会議の準備活動と歩調を合わせるかのように、内田は『大学新聞』と『帝国大学新聞』を舞台に発言を続けた。しかしこの間に論調に微妙な変化があらわれた。『大学新聞』に掲載したエッセイは社会時評的な色合いを帯びたものであった。ところが『帝国大学新聞』への寄稿からは、つまり 46 年の半ば頃から、日本における文化闘争、レーニンの理論と著書にかんする批評、ソ連（スターリン）の共産党史の書評と、次第に政治的な意味合いをもつものに比重が移っていった。この傾向は 47 年になっても続き、『文化新聞』1 月 6 日号（第 40 号）に寄せた「革命と改革の理論——レーニン主

義と農村改革——」も実践的含意をもつものであった。この論調の変化は、青年文化会議との関連でみれば、後に述べる第二次青年文化会議の新発足とそれへの内田の関与と相関しているように思われる。

青年文化会議に話を戻すと、会議のオルガナイザー役を担ったのは主に瓜生と中村で、かれらの直接・間接の交遊関係から会員が募られた。瓜生忠夫（映画プロデューサー）は大阪の北野中学、三高を通じて野間宏の1年後輩にあたり、その後、野間は京大、瓜生は東大へ進んだ。野間は京大で、内田の甲南高校時代の同級生、下村正夫（演出家）を知り、「ほとんど毎夜のように、神楽岡の下の方にある彼〔下村〕の下宿を訪ねていく」ような親しい間柄となった。¹¹⁾ こうして内田＝下村＝野間＝瓜生は大学生時代におたがいに知己を得るのだが、それ以前に、京大法学部の加古祐二郎が甲南高校教授だった縁で、すでに甲南高校時代に内田は三高生の瓜生と野間と繋がりがあったという。¹²⁾ こうして会議のいわゆる「関西グループ」が瓜生と内田を核として出来あがる。中村哲は成城高校、東大法学部を卒業した政治学者であるが、成城高校の関係で柳田国男の長男で生物学者の柳田為正や嘉門安雄、大山聡らが、また法学部の関係で団藤重光、丸山眞男、辻清明、佐藤功らが、また中村の文学関係の交遊から杉森久英、松村達雄らが会議に加わった。こうして会議の正式発足に先だって、45年中には30名のメンバーが集まった。¹³⁾

II. 準備会幹事による活動計画と運動論

機関誌『文化会議』の「文化通信欄」は、先に引用した文に続けて「〔1945年〕12月初旬より具体的に研究会、座談会を開始するに至り」と記しているが、その研究会や座談会の内容、参加者など詳細はいつさい不明である。続けて、『文化会議』の編集について触れている。「〔12月〕中旬第1回機関誌の原稿を募集。想像以上の好成績で12月中に大体の原稿が到着。昭和20年12月31日、敗戦の苦悩を込めた年の最後の日、幹事参集して文化会議の今後に就

11) 野間宏「小さな溶鉱炉」、前掲『野間宏作品集9』、1988年、49-50ページ。

12) 中村、前掲「丸山君の戦中・戦後の日々」4ページ。

13) 30名の名前は、機関誌『文化会議』の「同人名簿」欄に記載されている。

いて討究。併せて第 1 号の編集を終わる。」45 年 12 月中旬に投稿要請をして、早くも大晦日に第 1 号の編集作業を終えたこと、「幹事」たち（誰かは不明だが、前記の内田ら 5 名を含むものと思われる。以下、準備会の幹事と呼ぶ）が当日集まって会議の今後について検討を重ねたという。その計画案が記録されている。第 1. 年が明ける 46 年 1 月から、研究会の毎週開催と機関誌による研究活動。第 2. 「講演座談会」の定期的開催。第 3. 消費組合活動の開始。第 4. 「地方啓蒙活動」と「市民大学」の開設。まとめれば、会員間の共同研究、会員による都市や地方での啓蒙活動と民衆大学運動、消費組合活動の三つを柱とする活動計画がたてられたのである。ここにはいくつかの意識が混在している。専門を越えた共同研究への期待、大衆啓蒙活動にたいする知識人としての義務感、末広巖太郎以来の東大のセツルメント運動（あるいは明治以来の日本のセツルメント運動）と大正以来の民衆大学運動とを継承・発展させようとする意思が、それである。そしてこの計画は「1 月の総会」で正式に決定し、「一般に呼びかける予定」と結んでいる。この「通信欄」でもう一つ見逃せないのは、「各種文化団体との横断的連繋を速かに取り、統一戦線を布く必要もある」と会員に訴えていることである。¹⁴⁾ 「統一戦線」という運動論の採用が 30 名の会員の総意であるかどうかはわからないが、少なくとも幹事たちのあいだでは合意をみたものであろう。ここに文化運動としては過大ともいえる計画と意識的な運動論とをもって会議の出発がはかられたのである。

III. 青年文化会議の設立総会

会議は 1946 年 2 月 2 日に東大の山上会議所で設立総会を開き、そこで設立「宣言」を發表し、役職者を決定した。そのことは 2 月 11 日発行の『大学新聞』51 号に記載されている。旧仮名づかいを一部修正し、句読点を加えて以下に引用する。

14) 『文化会議』第 1 号、71 ページ。

宣 言

青年文化会議は新時代に共感を持つ二十代及三十代の青年の団体であって、共同研究の討議機関であり、社会的啓蒙の行動体である。社会的経済的民主主義の実現は、吾々の共同目標であり、社会に残存する封建性と非合理性は、その共同の闘争目標である。されば吾々は新しい文藝復興の担い手として更に亦新しい社会秩序建設の前衛たらんことを期するものである。

従来の自由主義者の根本的欠陥であった節操と責任感の欠如を痛感し、日常生活に於いて社会的モラルを体現し、以て新生活運動の推進体たらんと欲する。我国の自由主義者は、明治維新以来の自由民権運動を継承育成することなく、封建的なものを克服し得ず、^{あまつさ} 剩え、軍国主義に屈服さえするに到った。之に鑑み吾々は自ら反省すると共に、かゝる一切の旧き自由主義者との袂別を宣し、茲に新なる民主主義建設の軌道を拓かんとする。この為我等相集り、社会文化一般の現実問題を討議して自らを豊にし、且その成果を以て若き民衆に呼びかけ、啓蒙活動に邁進することを誓約す。

昭和二年二月二日 青年文化会議

◇議長 川島武宜（東大・法・教授） 副議長 中村哲（台北大・文政・教授）

書記長 瓜生忠夫（大学新聞）

◇運営委員（五十音順） 青山敏夫（全日本映画従業員組合同盟書記長） 小口偉一（東洋文化研究所員） 内田義彦（経済評論家） 倉橋文雄（世界経済調査局） 嘉門安雄（東大美学助手） 杉浦明平（文明評論家） 桜井恒次（大学新聞常務理事） 土屋清（朝日新聞論説員） 関島久雄（自由学園教授） 野間宏（作家） 豊田利幸（東大・理・大学院） 柳田為正（東京女高師教授） 丸山眞男（東大・法・助教授）

川島武宜が草したといわれる、かなり高い調子の「宣言」には、¹⁵⁾ いくつか

15) 「宣言」の起草者に関して諸説がある。長谷川泉は櫻井恒次説、丸山、中村、丸山眞男手帖の会は川島説であるが、瓜生は「川島武宜も加えた小委員会みたいなものが——わたしも参加した——で、青年文化会議の宣言が起草され」たとして共同起草説をとっている。これらを総合的に勘案すれば、起草委員会のような少数の者の合議を経て、最終的に川島が執筆したということになる。長谷川泉『長谷川泉自伝』至文堂、2003年、167ページ。松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男回顧録』岩波書店、2006年、下巻、26ページ。中村『丸山君の戦中・戦後の日々』4ページ。丸山眞男手帳の会編『丸山眞男話文集 1』みすず書房、2008年、149ページ。飯塚浩二『比較文化論』評論社、1970年、巻末の瓜生「解説」279ページ。

なお注6の座談会で、櫻井は「宣言」文をあらためてなぞるかのような発言をしている。「われわれは、古い時代に育った自由主義者、あるいは進歩主義者といわれてきた人びとの欠陥を、こ

の特徴がみられる。まず、冒頭の「新時代に共感を持つ」という表現で、占領軍が主導していた敗戦後の日本社会の諸改革に積極的に与しようとする立場が暗示されている。その改革に一人一人の個人としてではなく、20代と30代の青年が集団を組んで参加しようというのである。その団体の基本性格は、「共同研究の討議機関」であると同時に「社会的啓蒙の行動体」であるとされる。共同研究と社会啓蒙は準備会の幹事たちが表明した基本方針に添ったものであるが、あらたに戦後の社会改革への自覚的な参加が打ち出されたのである。その社会改革の最初のそして最大の標的に据えられたのは、戦後社会に残存している「封建性と非合理性」である。ここで封建制ではなく封建性といわれていることに注目したい。制度変革もさることながら、社会のさまざまな制度や風習などを規定している社会意識に、つまり制度を改革してもなお変改しえずに残るものに強い関心が払われたのである。さらに、封建性と非合理性とが並記されていることも留意したい。この二つの観念は別のものではなく、むしろ同一認識の裏返し表現である。封建性とは詰まるところ非合理性のことであり、したがって封建性を克服しようとするれば合理性を追求しなければならないのである。

その封建性と非合理性とに対する組織的な闘争によって、「社会経済的民主主義」の確立が目指される。しかし社会経済的な民主主義とは何なのか、その内実は具体的に明らかにされていない。当時にあつてはこうした表現で了解されうるような時代感覚と共通認識とがあつたのであろう。この民主主義を樹立するために、会員が「新しい文芸復興」の担い手になるとともに、「新しい社会秩序建設の前衛」となる決意が示される。ここで文芸復興という言葉が使われ

のながい暗黒時代を通じてみてきた。が、そこには思想と行動の一致、良心の問題が欠けていたように思われる。その点では真の意味のリベラリストとも異なる人が多かった。これらの人びとと決別し、その欠陥を身をもっておぎなうてゆくのでなければならぬということが、ひじょうに強くわれわれの世代の反省として出ている。……そういうオールド・リベラリスト——わたしは明治から大正初期に青春を送ったリベラリストと称せられる一群をそう呼んでいるのですが、そういうオールド・リベラリストのもつような、節操感のない、あるいは責任感のない行動、特に革命期にあきらかにオールド・リベラリストとしての限界を示している人びとの欠陥と悲劇を、何とかしてわれわれの世代の体内から清算しなければならぬと、わたしは痛感するんです。」(傍点竹本)『光』1947年11月号、4ページ。

たのは、戦時中の文芸復興の動きを想起してのことであろうか。プロレタリア文学の後退を受けて、1933年から35年頃にかけて「文藝復興」の呼びかけが起こり、『文学界』や『文芸』といった雑誌が創刊され、文芸復興叢書が刊行された。また、「文芸復興座談会」（『文芸春秋』1933年11月号）が催されて、純文学と通俗文学の統一が唱えられた。他方で、林達夫の『文芸復興』（1933年）、羽仁五郎の『マキャヴェリ君主論——その歴史的背景——』（36年）、『ミケルアンジェロ』（39年）があいついで刊行され、さらに渡辺一夫がこの時期にラブレ研究を精力的に進め、少しのちの1941年4月からは、花田清輝が「ルネサンス的人間の研究」を『文化組織』に発表し始める。¹⁶⁾ ジャンルもそれぞれの志向も異にするとはいえ、マルクス主義の影響を受けた文学や研究が逼塞するなかで、ヒューマニズムの“再生”の願いを秘めた作品があいついで世に送り出されたのである。

そのなかでとりわけ注目すべきものに、1933年7月に結成された「学芸自由同盟」がある。1933年1月に政権を掌握したヒトラーは、5月に入るとマルクス、フロイト、トーマス・マンらの非ドイツの文書の焚書を断行した。長谷川如是閑、三木清、新居格らは直ちにこの焚書に抗議をする声明を出してこれに応えた。日本では同年4月には鳩山文相が京大法学部教授・滝川幸辰の辞職を求めているいわゆる滝川事件がおこり、滝川の『刑法読本』も発禁処分を受けた。こうした内外の文化統制や思想弾圧にたいする抗議と防衛とのために、徳田秋聲を会長に長谷川、三木、新居、広津和郎、秋田雨雀、豊島与志雄、菊池寛らによって結成されたのが学芸自由同盟である。これは文化擁護のために専門や思想的立場を越え統一戦線を組もうとする試みでもあったのだが、現実には対抗力となりえずに終わった。こうしたことを顧みると、「宣言」の「新しい文芸復興の担い手」となるという一句は、学芸自由同盟の経験を踏まえながら、準備会の幹事たちが提示していた統一戦線の方針をあらためて確認したものと解される。

もう一つの決意表明、「新しい社会秩序建設の前衛たらん」は、「社会的啓蒙

16) 花田の連載は、戦後『復興期の精神』我観社、1946年にまとめられた。

の行動体」という会議の基本規定を形を変えて表現したものであるが、宣言に「社会経済的民主主義の実現」をその共同目標に掲げることで、会議は文化運動にとどまらず、社会・政治運動の団体であることを宣言したのである。それが川島や運営委員たちの考えであったとしても、会員の総意をどれだけの反映したものであるのか、疑問が残る。ただここで使われている「前衛」の表現は、「宣言」末尾の「若き民衆に呼びかけて、啓蒙活動に邁進することを誓約す」と照応している。会議に集った若い“前衛”的知識人たちは、啓蒙活動を介して、民衆の同じく前衛である「若い民衆」とともに、新しい社会秩序を拓く先導役を担おうとしたのである。そこには、啓蒙活動に励むことで、若い民衆と考えや行動を共にしうはずだという、知識人の思いこみと気負いとがみられる。

「宣言」と準備会の幹事提案との間の大きな違いは、前者が旧世代の自由主義者に批判を向けたことである。宣言はそれに半分以上のスペースを割いて、従来の自由主義者の根本的欠陥は「節操と責任感」の欠如にある、と断罪する。こうした倫理的批判は、えてして批判対象の全否定に陥りやすい。その人をとりまく厳しい状況のもとでありえた選択肢の現実的可能性、身の処し方の奥行きや屈折、それに伴う発言のひだの陰影や諧謔、沈黙や服従を装った抵抗といったことに目が行き届かずに、表面的な言動とその政治的な効果とのみに評価の尺度を求めがちになる。「宣言」は、自由主義者が「封建的なもの」を克服できなかったこと、さらに軍国主義に「屈服」したこと、つまり自由主義を掲げながら、封建的なものを公私にわたって一掃しえなかった思想的無節操と、軍国主義に屈服して戦争を阻止しえなかった結果責任とを問うのである。しかもこの文脈では、思想上の無節操と政治的結果責任との因果関係が示唆され、封建的なものを克服できなかったことが軍国主義に屈服した原因だとみなされている。それゆえ、会議は先人の轍を踏まないという反省の上に立って、「一切の旧き自由主義者との袂別」を宣言し、あたらしい「社会的モラルを体現」した「新生活運動の推進体」として、「民主主義」の建設を目指すという。ここにあるのは、倫理的リゴリズム（厳格さと潔癖さ）と理想主義と将来の結果責任を果たしうるとするある種の楽観主義と、最後には強烈な世代意識である。

かれらが旧世代の自由主義者と決別するという潔癖な態度と、会員を 20 代

と30代に限定するという世代意識にとらわれたのは、瓜生によれば、一方で、「当時の三十代——とくに青年文化会議の大多数を占めた三十代前半——は、兵役と特高の板挟みになって成長した世代で……青春を埋葬してすごした」¹⁷⁾という被害者意識と、他方で、その思想的窒息の片棒をかつぐか、かつがないまでも酸欠状態に陥るのを防ぎえなかった自分たちより上の世代、とりわけ「旧き自由主義者」に対して不信と怨念とを抱いていたからである。丸山眞男も、青年文化会議は「30歳そこそこの、多かれ少なかれ被害者意識と世代論的発想とを共有した知識人の結集」であったと後に述べている。¹⁸⁾ こうしたみずからを被害者とする世代意識は悪くすると排他意識や純血主義を生み出しやすくなる。一例をあげると、会員候補者について中村が丸山に相談したところ、木村健康と林健太郎の名前が出た。ところが「丸山君は〔二人は〕ダメだといって、彼の一高時代の同級生の杉浦明平と寺田透を入れる」ことになったという。¹⁹⁾ 丸山の選別基準がどこにおかれたのかは不明だが、木村は1939年におこった東大経済学部のいわゆる平賀肅学のさいに河合栄治郎に殉じて助手を辞職し、戦後の45年11月に大内兵衛、矢内原忠雄、山田盛太郎、有沢広巳、脇村義太郎とともに経済学部に復帰した人物である。会議結成のころは36歳であったから、少なくとも年齢は会員資格を満たしていた。丸山には「自称自由主義者」河合との縁の深さが問題とみえたのであろうか。実際のところは、高校や大学の同窓、その外縁での交遊、さらには師弟関係といった人的関係の濃さ、端的にいえば「仲間」と認められるかどうか勧誘の動機となった。劇作家の木下順二は、青年文化会議からも46年1月に創刊された『近代文学』からも誘いを受けなかった。その理由に、中心的会員の「誰とも戦前からの接触をもっていなかった」ことをみずからあげているが、木下のばあいは、「それよりもまず、45年には私はまだ一つも作品を発表していな」かったことが

17) 瓜生、前掲『放送産業』6ページ。

18) 丸山眞男「近代的思惟」（1946年）にあらたに付した「後記」。『戦中と戦後の間』みすず書房、1976年、『丸山眞男集』第3巻、1995年、5ページ。

19) 中村、前掲「丸山君の戦中・戦後の日々」4ページ。

問題とされたのである²⁰⁾。したがって文化人や知識人の少なくとも卵と認められることが加入の前提となっていたのである。

林健太郎のぼあいには、青年文化会議からも会議と結びつきの強い雑誌『潮流』(1945年12月創刊)からも参加の誘いを受けなかった。林自身の言によれば、当時のかれは、このグループと「年齢的にも〔講座派の影響という点で〕思想的にも一番近かった」にもかかわらず、東大の法経の研究室の周囲に出来ていたこのグループの人々と「人間的なつながりはなかった」ために、仲間には入れられなかったという。²¹⁾ それだけではなく、会員に一人の共産党員もいなかったといわれる青年文化会議のことであるから²²⁾、丸山は、思想的に「共産党系」とみずから認めていた当時の林を²³⁾受け入れられなかったのかも知れない。もっとも林は、清水幾太郎、大河内一男、飯塚浩二、宮城音弥、丸山眞男らによって青年文化会議と同じ月に設立された二十世紀研究所には、丸山から勧誘を受けて入所したというから、²⁴⁾ 丸山は林に排除の論理だけで接したのではなかった。

こうして会員資格のスクリーニングの基準は、「世代」、「仲間」、「文化人・知識人としてのキャリア」、「思想」(自由主義)の四つにおかれたのである。

すでに述べたように、会議の準備会幹事たちは他の文化団体との統一戦線を指向していた。なるほど「宣言」では統一戦線の語は消え、わずかに「新しい文藝復興」という表現にそれが暗示されるにとどまったが、会議発足後の4月6日の総会で、山川均が提唱した「人民戦線」(民主人民連盟)の結成に参加することを申し合わせた(『大学新聞』1946年4月11日号)。ところが会議自身の組織化にあたっては、統一戦線の趣旨に反するような会員の選別がなされたのである。「新時代に共感を持つ二十代及三十代の青年の団体」を目指しな

20) 木下順二『あの過ぎ去った日々』講談社、1992年、51ページ。もっとも「すこしのち……下村正夫の関係で、木下順二も〔会議の〕文学・芸術班」に加わったという(飯田泰三、前掲「中村哲の生涯と学問」92ページ)。

21) 林健太郎『歴史と体験』文藝春秋、1972年、367、375ページ。

22) 瓜生、前掲『放送産業』16ページ。瓜生証言はあくまでも準備段階でのことで、それ以後に共産党員になった会員がいなかったわけではない。

23) 林、前掲『歴史と体験』366ページ。

24) 同、383-384ページ。

から、²⁵⁾20代の青年や学生には広く門戸が開かれずに、事実上30代の団体に
してしまった。文化人や知識人としての資格やキャリアを暗黙のうちに問うた
からである。その30代も東大出身者かその関係者の仲間内に限られていた。
このように青年文化会議は、実質的には東大系知識人のグループかサークルの
ような性格をもち、文化団体としては組織的な限界を初発からかかえていたと
いわざるえない。会議が採用した、40歳になれば自動的に退会させるという
新陳代謝の原則も、裏返すと、創設会員から40歳以上の者を機械的に排除す
ることにもなった。こうしたさまざまな問題の集約点が「一切の旧き自由主義
者との袂別を宣し」の一句である。ところが瓜生によれば、旧自由主義者（以
下では「オールド・リベラリスト」と言い換える）と「思想的に、実践的に、
人間的に袂別してわが道を行こう」と宣言した「この一句に、青年文化会議の
全目的が集約され、これがないと、この会の特質はなくなってしまうと思われ
た」のである。²⁶⁾そしてこれに積極的に賛成したと思われるのが「与瀬組」と
呼ばれた大塚久雄、飯塚浩二、川島武宜の三人である。²⁷⁾

IV. 「与瀬組」

大塚、飯塚、川島の3人はともに戦争末期に神奈川県との与瀬に疎開してい
た縁で与瀬組と呼ばれたが、特別な意図や思想をもつ会議内のグループという
わけではない。かれらは会議の最年長組で、敗戦の年に飯塚は39歳、大塚は
38歳、川島は36歳であった。40歳ルールに照らせば、飯塚や大塚は1年か

25) 20代の加藤周一は、「1930年代、殊にその後半に20代に達した都会の青年」あるいは「知識階級」は、つまりは終戦時30代の人間は、「新しき星董派」と呼ぶべき「無力で無学」な「戦争世代」だとして、かれら30代に批判を浴びせかけた（「新しき星董派に就いて」加藤・中村真一郎・福永武彦『1946・文学的考察』真善美社、1947年、富山房百科文庫、1977年）。それに対して、30代の杉浦明平は、「中村（真）君たちが、われわれを批判してしごとをやっているけれども、どうも言っていることがわからん」と全否定の態度を、そして花田清輝は、「ぼくは、もっぱら中村、加藤に对立して、彼らをフンサイする意外に手はない」と対決の姿勢をとった（前掲『光』1947年11月号、5、9ページ）。一口に青年といっても、20代と30代とのあいだの戦争体験の違いが、戦後への踏み出し方の差を生み出している。

26) 瓜生、前掲『放送産業』18ページ。

27) 瓜生、前掲「解説」（飯塚浩二『比較文化論』）280ページ。

2 年のうちに会議を去らざるをえない年齢に達していた。それを承知で彼らは参加したのである。会議の中心メンバーの中村哲が 33 歳、内田義彦が 32 歳、丸山眞男が 31 歳、瓜生忠夫が 30 歳とみな 30 代前半であり、しかも会議の準備と結成の時期にはまだ社会的に無名に近い存在であったことを思えば、与瀬組は 3 人とも東大の若手ないしは中堅の教官であり、学問的にも、飯塚自身の言によれば「三人とも、戦争が終わったときは学者としていちばん脂ののった働きざかりの年であった」から、²⁸⁾あえて会議に参加する必要がないともいえたのである。それだけに参加にはそれなりの強い動機があった。東大の学問的旧套さと組織的ヒエラルキーとに対する反発である。

1939 年 4 月、大塚は平賀肅学で東大経済学部を去った指導教授の本位田祥男と入れ替わるように、法政大学経済学部教授からいわば格下げの形で専任講師として迎えられた。転任直前の 38 年 2 月には『株式会社発生史論』を、同年 12 月には『欧州経済史序説』をあいついで出版し、気鋭の経済史研究者としての地位を確立しつつあった大塚は、東大着任直後の 39 年 5 月に、「資本主義精神起源論に関する二つの立場——ヴェーバーとブレンターノ——」を経済学部の紀要に公表し、ウェーバー研究者としても注目を浴びることになった。大塚が着任した同じ年に経済学部を卒業して大学院に進んだ内田義彦は、当時文学部の学生であった瓜生忠夫に、大塚のウェーバー研究に注目するように助言したという。それは、マルクス主義研究が窒息させられるなか、アダム・スミスやフリードリッヒ・リストの研究とならんで、ウェーバー研究が本格化しようとしていた頃のことである。それに棹さしたのは、大塚の後輩・梶山力が前年（1938 年）に翻訳刊行した『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』である。本位田ゼミの最後の学生であった小林昇も、——小林のゼミの先輩に、大塚、梶山、高橋幸八郎、松田智雄がいる——この訳書によってウェーバーに開眼した一人で、「ウェーバーの人を緊縛する論旨の運びはもとより、訳文の希有の明晰さと一種の香気とは、わたくしを新しい次元の世界

28) 飯塚浩二「興瀬グループ」『大塚久雄著作集』第 10 卷「月報」10、岩波書店、1970 年、2-3 ページ。

史に連れて行ってくれるものであった」と、訳書を高く評価している。²⁹⁾

他方、瓜生は大塚の論じる経済史学を、日本の現況と自分とに引き付けて受けとめた。瓜生によれば、大塚の学問は、昭和10年代の日本についても現代についても直接語ることがなかったにもかかわらず、ヨーロッパにおける近代の形成の必然性とその主体形成の必要性とを説くことによって、聞く者、読む者に天皇制社会の「前近代性」つまり「歴史のおくれ」をおのずから意識させてくれた。それだけでなく大塚の講じる近代的人間の創出や非マルクス主義的な近代の形成論（歴史論）は、当時の「革命的マルクス主義者の形式論理、公式主義、人間軽視の弊」から瓜生を護り、さらには「人間崩壊現象である“転向”を、われわれ以後の世代からはくいとめることができるのではないか」という希望をもかれに抱かせたという。³⁰⁾最後の転向回避のくだりは第3者には解りにくいが、「大塚史学は……個人というもの、そして人間というものを、歴史的発展のなかで掘下げ追求するのに役だった」³¹⁾という表白と係りがあるのかも知れない。

大塚はウェーバーからプロテスタント信仰の意図せざる結果を読み取った。すなわち自分に与えられた職分に禁欲的に精励することで救済されるという信仰が、資本主義に適合的な合理的な倫理的主体の生成につながった、ということである。大塚は、この救済の信仰が資本主義の合理性に逆転するというウェーバー・テーゼをもって、当時の非合理的なものが支配する体制とそれに追随する指導教授の本位田³²⁾とに対峙したのである。他方で瓜生は、1940年こ

29) 小林昇「回想の梶山力」梶山力訳・安藤英治編・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』未来社、1994年、387ページ。

30) 瓜生、前掲『放送産業』12ページ。

31) 同、11ページ。瓜生は後にあらためて、「大塚さんは“転向”から人間を救う論理と倫理」を示したと述べている（『暗い谷間に静かに輝いた』『大塚久雄著作集』第2巻「月報」2、1969年、9ページ）。

32) 本位田は、1937年の経済学部長土方成美による矢内原忠雄の言論活動非難に同調し、矢内原を辞職に追い込んだ前歴があるが、平賀肅学にいたる経済学部の内紛では、土方派（革新派）の「大番頭」としての役回りを演じた（竹内洋『大学という病—東大紛争と教授群像—』中公文庫、2007年、209、244ページ）。東大離職後は、繊維統制会の理事長や大政翼賛会経済政策部長に就いた。その時代の一つのエピソードについては、小林昇『山までの街』八潮社、2002年、3-4ページ参照。

ろに、下村正夫の父・下村海南（宏）の田園調布の家を根城にして、武谷三男、内田義彦、下村正夫、内山弘正と技術論の研究をおこなっていた。³³⁾かれらは技術が求める合理性の徹底と技術者の経営的地位の向上とによって、非合理的な企業経営や社会体制に風穴をあけようと試みていたのである。単純に言えば、非合理的なものに対抗し、合理性の領域の拡大をはかろうとしたのである。したがって合理性の追求という目的において、このグループと大塚とは一致していたが、それを実現させる論理も方法も違っていた。³⁴⁾しかし瓜生は、そしておそらく内田も、その違いよりも目的の一致のほうを重くみて、大塚や武谷に親近感をいだいたのであろう。こうして大塚は内田と瓜生とを介してインプリシットなかたちで技術論グループとつながっていた。

1944年に、技術論グループは、瓜生を除いて、内山、武谷、下村、内田の順で検挙された。内田は検挙されたさいに、特高から大塚のことをしつこく聞かれ、また大塚の『欧州経済史序説』の危険な箇所を指摘しろと迫られた。釈放にあたって（1945年3月?）、「今度は大塚をつかまえるから、そういつとけ！」と、捨て科白を浴びせられた。大塚自身は、当局から目をつけられること自体が不審で、そのことを瓜生に率直に伝えた。³⁵⁾その大塚に東大内部からも魔の手が伸び、1944年2月に『近代欧州経済史序説（上巻）』を刊行したさい、東大経済学部のある教授が、この本が危険だと文部省にご注進に及んだの

33) 武谷は同じ頃、内山（弘正）、大和、川村、佐山、内田、野口らと技術論の研究サークル活動をしていたと言っている。このグループと下村邸での研究グループとの関係はいまのところ不明である。前者は技術者の研究サークルかも知れない。『武谷三男著作集』第1巻、勁草書房、1968年、7ページ。

34) 瓜生、前掲『放送産業』12ページ。

35) 石崎津義男『大塚久雄 人と学問』みすず書房、2006年、80-81ページ。なお大塚は、『近代欧州経済史序説』を戦後に再版したさい、それに1946年2月2日付（青年文化会議設立総会と同日）の序文を付し、そこで、「いま、農地改正法案、労働組合法案などの通過の後をうけてまさに歴史的な総選挙の渦中にこの再版序文を書き記しつつ、実に感慨無量である。読者願わくは、本書における主要なテーマの一つが、他ならぬ、近代の西欧において歴史上類比をみない巨大な生産力建設のいわばパン種となったものはかの独立自由な自営農民層のうちにこそ見出されるべきだという史実の追求、であつたことを想起していただきたい。」と述べている（『大塚久雄著作集』第2巻、岩波書店、1969年、8ページ）。このように大塚は、戦後改革とりわけ農地改革が戦時中の自分のイギリス経済史研究の成果（主張）と直結するものであるとし、さらには戦後第1回の総選挙（46年4月10日実施）の帰趨に強い実践的な関心と期待を抱いていた。

である。³⁶⁾こうした官憲と東大の先輩教授からの陰湿な圧力は、大塚に40代以上の世代への警戒心と反発を芽生えさせ、戦後になって、無名の者たちの多い集団への接近を促したと思われる。

実証を重んじる飯塚浩二は、東大のオールド・リベラリストを支配していた「訓誥の学」に対抗しようとしていた。オールド・リベラリストの目から見れば、東大現役教官が青年文化会議へ参加することは、それ自体が「不謹慎」な行動であり、ましてや自分たちとの「決別」を宣するのは不埒な振舞いであった。³⁷⁾川島武宜のぼあいも、オールド・リベラリストとの決別は、師である我妻栄の実証法学への批判と決別とを意味していた。³⁸⁾30代前半の会員たちは、戦争で青春を奪われたという思いが強いだけに、あったであろう青春への憧憬が深く、それを奪った国家や軍などへの怨念を抱いたのに対して、与瀬組3人は、身近な同僚とかれらとつながる国家権力とからの圧力を直接に感じていた。そのことが「一切の旧き自由主義者との袂別」という衝撃的な一句を挿入する心理的な動機となったと思われる。同時にそれは、前述した青年文化会議の組織的弱点の一つである東大の仲間内という側面を、近親憎悪的にいつそう際立たせることになった。この一句が、東大の長老教授の感情的反発を招き、圧力がかけられてきたことは、その証である。このようにみれば、青年文化会議は、瓜生のいうように、「東大閥」を作るという主観的意図をもたなかったかも知れないが、³⁹⁾良くも悪くも東大の文化運動という性格を大きく脱しえなかった。後に瓜生自身が、会議を「東京大学を“下から”民主化しようとした戦後最初の運動」と総括的に述べていることが、それを裏づけている。⁴⁰⁾

このことと関連して、青年文化会議の名称にまつわることを付記しておきたい。先にも述べたように、青年文化会議はその設立に先だって機関誌『文化会

36) 同、82 ページ。

37) 瓜生、前掲「解説」（飯塚浩二『比較文化論』）278、281 ページ。

38) 中村、前掲「丸山君の戦中・戦後の日々」4 ページ。川島は、1941年と42年に書いた「統制経済における法と倫理」（『経済統制年報』第1巻第1号）および「自由経済における法と倫理倫理」（『法律時報』第14巻第6号、第7号）が、内閣情報局から自由主義的論文として脱まれ、逮捕されなかったという（川島武宜『ある法学者の軌跡』有斐閣、1978年、173-174 ページ）。

39) 瓜生、前掲『放送産業』5 ページ。

40) 瓜生、前掲「解説」（飯塚浩二『比較文化論』）280 ページ。

議』第 1 号を刊行したが、その機関誌名は『青年文化会議』ではなかった。その奥付の発行元も「本郷区本富士町 1 東大内 大学新聞社 文化会議 責任者 櫻井恒次」となっており、また 26 ページに載せられた設立総会の案内にも、「文化会議 設立総会 二月二日（土）午後一時半 於・東大山上会議所」とある。さらには 65 ページには「文化会議への提案」と銘打たれた欄がある。いずれも「文化会議」で、青年の文字はない。ただ一箇所、櫻井恒次の寄稿文のなかに青年文化会議の名が記されているだけである。このことから準備過程の少なくとも 45 年 12 月末までは、櫻井など一部の者のあいだでは青年文化会議の名が意識されていたとしても、一般には文化会議の名称が使われ、設立総会までのあいだに青年の文字が付加されたと思われる。青年の冠にこだわったのは、言い換えれば、40 代以上の壮年と老年の排除を強く主張したのは、20 代末から 30 代前半の青年よりも、40 代に近い中年組というべき与瀬組であった可能性があるが、それを直接裏づける資料はない。⁴¹⁾

V. 第二次青年文化会議

青年文化会議は 1946 年 2 月に設立され活動を始めた。ところが、早くも 46 年後半になると活動が低調になり、同年末には自然消滅状態になったといわれている。その原因として、瓜生は、一つにはオールド・リベラリストへの決別という一句が東大の「おエラ方たち」の怒りを買ひ、圧力がかかってきたこと、とりわけそれによって活動拠点であった東大の山上御殿の使用ができなくなったこと、二つには「結成当時は 80 パーセントまで無名であった同人たちが、46 年後半になると、もはやタダの無名ではなくなり、各方面で重要な働き手

41) 丸山眞男手帖の会は、「1945 年 10 月初旬、中村哲、瓜生忠夫、桜井恒次、内田義彦、嘉門安雄らが主唱者になって『文化会議』の結成が呼びかけられ、11 月、飯塚浩二、内田、瓜生、大塚久雄、嘉門、川島武宜、桜井、杉森久英、中村、丸山眞男らを発起人として設立された」（前掲『丸山眞男話文集 1』149 ページ）と記している。前半の「文化会議」の名での呼びかけは、第 1 号の記述と符合している。後半の発起人のもとで、11 月には文化会議が「設立された」というのは、どういことだろうか。青年文化会議の設立総会前に、「文化会議」が存在しということだろうか。またこれら発起人のなかで、与瀬組 3 人が機関誌『文化会議』に記載された「同人名簿」30 名のなかに名前がないのは、どうしてだろうか。青年文化会議の設立総会にいたる過程には、なお不明なことが残されている。

として引っぱりだこになりはじめ、それだけ集まりにくくなった」ことをあげている。⁴²⁾こうした外的要因があったにしても、それを跳ね返し乗り越えるだけの内部的条件が整えられていなかったことが、退潮を招いた真の原因であろう。その一つに先述した会議の組織的弱点があった。もう一つ、よりいっそう重要なことは、文化運動が本質的に抱える問題がある。会議は会員の共同研究と社会への啓蒙活動とを活動目標に掲げたが、実際には、共同の学問的・芸術的創造よりも、民衆を啓蒙することに主眼をおき、それに大きなエネルギーが割かれた。そうした運動を継続しうるためには、研究者・文化人と民衆とのあいだで「啓蒙」が成立する言語等の共通基盤が作られ、両者の間で双方向的に啓蒙を交換することが求められる。青年文化会議が、その課題を意識し、その解決に組織的に努力した形跡がみられない。そのことが運動のいちはやい退潮を招いたように思われる。

ところが1947年5月になって、自然消滅状態にあった会議の再建がはかられることになった。1947年6月2日発行の『週刊文化タイムズ』第20号は、「反封建を基礎に新学問の建設に邁進 青年文化会議新発足」というキャプションをつけてそれを伝えている。この新発足した青年文化会議（以後、第二次青年文化会議という）について、会議と関係の深かった『帝国大学新聞』がそのことを記事にせず、日本民主主義文化連盟（文連）の機関紙『週刊文化タイムズ』が伝えたことは小さな謎である。ちなみに内田義彦は、この機関紙の第1号から第3号に「ワイマール憲法の崩壊」と題する小論を寄稿している。管見のかぎり、第二次青年文化会議を紹介した文献は見当たらないので、以下に記事全文を引用する。

反封建を基礎として、20代、30代の進歩的文化人をもうら、昨年2月に誕生した「青年文化会議」では、5月22、29日の両日、東大都市学会研究室で、新たなる状況に対処するための運営委員会を開催、次の如く、新方針を決定した。

当日の出席者は、議長中村哲（法大法）常任川島武宜（東大法）宇野〔安藤？〕

42) 瓜生、前掲『放送産業』18-19 ページ。

良雄（東大経）⁴³⁾内田義彦（専大経）湯川〔和夫〕（日大哲）田代正夫（東大経）櫻井恒次（帝大新聞）瓜生忠夫の諸氏

- 1、各専門分野の相互啓蒙機関の役割を充分に果たすことを確認し、月 1 回の創会を開催研究発表を行うこと
- 2、対外啓蒙活動の対象を勤労者、農民層に置くこと
- 3、春秋 2 回、東京において公開講座を開講すること、年 1 回、京都あるいは大阪において開催すること
- 4、関西支部を京都に設置すること、その世話人として、大阪商大武内弘重教授に〔を〕推す
- 5、機関紙（季刊）を発行、会員の最大労働を発表することを確約すること

「新たなる状況に対処する」こと、これが休眠状態にあった青年文化会議をあらためて発足させようとした動機とされているが、47 年になって生じたその新状況とは何なのか、触れられていない。丸山眞男も「46 年と 47 年とはまるで違う……その一年一年の時代の違いを背景に入れないと、戦争直後というふうに一括できない」と指摘しているが⁴⁴⁾、そのあらたな状況とは、全官公庁労組共闘会議の「2・1 ゼネスト」が、マッカーサーの中止命令で決行直前に挫折したこと、さらにはその後に生じた国内状況を指していることはほぼ間違いないであろう。外では、3 月 12 日、アメリカのトルーマン大統領が連邦議会で演説を行って「トルーマン・ドクトリン」と呼ばれる外交原則を示し、東西両陣営のあいだの「冷たい戦争」の兆しが見え始めていた。国内では、4 月 20 日に第 1 回の参議院選挙が実施されたのに続いて、4 月 25 日には衆議院選挙がおこなわれ、社会党が第 1 党に躍り出て、社会党内閣の可能性が開かれた。しかし 5 月 14 日には、社会党左派の鈴木茂三郎・加藤勘十は共産党との絶縁を言明し、社共の統一戦線の芽は断たれてしまった。それに先立つ 5 月 3 日には、日本国憲法が施行されていた。2・1 ゼネストの中止で「熱に浮かされ

43) 宇野良雄は安藤良雄の誤記と思われる。1946 年 10 月 13 日に、青年文化会議の後援のもとに「わが青春に悔いなし」の映画会が開催されたが、上映後の批評会の出席者の一人に安藤良雄の名があるし（『帝国大学新聞』46 年 10 月 16 日号）、また中村哲は、青年文化会議結成にあたって、経済の「安藤良雄、田代正夫」に声をかけたといっているからである（中村哲『不安と反抗』法政大学出版局、1954 年、85-86 ページ）。

44) 前掲『丸山眞男語文集 1』116 ページ。

たような革命幻想がたちまち潰え去」と同時に、⁴⁵⁾「争議を指導した共産党はミソをつけた」⁴⁶⁾といわれる。47年年初から青年文化会議が新発足をする5月下旬までの状勢とは、つまるところ、「革命的」気運の高揚とその急速な冷却、そのあとにきた共産党の退潮と社会党の躍進、そして外には東西冷戦の足音、といったことであろう。

青年文化会議を建て直そうとした人びとは、こうした新状勢に反応したのである。かれらの学問的、芸術的な意欲も旺盛であったろうが、とりわけて政治状況の推移に関心が強かったのである。このことは新方針のなかにもあらわれている。啓蒙活動の対象は、これまでは学生、婦人、農民、都市の商工業従事者、さらには資本家・地主の一部をも含む広い国民各層であったものが、今度は「勤労者、農民層」に限定されたのである。それは、労働運動や農民運動を側面から援助し、その再建強化をはかることを意識したからであろう。また「各専門分野の相互啓蒙機関の役割を十分に果たす」とあるように、文化運動での統一戦線の構築をあらためて目標として位置づけている。さらに従来の青年文化会議が東大あるいは東京の運動であった限界を意識して、京都に関西支部をおき、京都ないしは大阪での公開講座の開催を目指している。

人事では、議長の小島が常任運営委員に退き、代わって中村が議長に就いた。前回から変わらずに運営委員を務めたのは、書記長から運営委員になった瓜生を含めて、内田、櫻井の3名のみで、あらたに宇野〔安藤〕、湯川、田代が加わり、野間や丸山らは運営委員から退いたと思われる。と思われるというのは、「当日の出席者」と書かれているので、出席しなかった運営委員がいる可能性を排除できないからである。いずれにしても、第一次とこの第二次の青年文化会議を通して、変わることなく中心的役割を担ったのは、中村、瓜生、櫻井、川島、そして内田義彦であった。

第二次青年文化会議は、1947年7月21日に設立大会を開いた「全日本民主主義文化会議」に主催団体の一つとして加わったものの、⁴⁷⁾その後は目立っ

45) 中村稔『私の昭和史・戦後篇上』青土社、2008年、189ページ。

46) 本多秋五『物語 戦後文学史(全)』新潮社、1966年、

47) 柘植秀臣『民科と私-戦後一科学者の歩み-』勁草書房、1980年、88-89ページ。

た活動はみられず、翌 48 年 4 月になって、いわゆる東宝争議に青年文化会議の名がとつじょ登場する。この月、東宝は 1,200 人の人員整理案に発表し、組合はこれにこたえて無期限ストに入り、争議は山場を迎えた。48 年 4 月 29 日の『大学新聞』1071 号は、青年文化会議が 4 月 30 日に東宝問題の懇談会を開催し、「今後の態度」を決める予定である、との予告記事を載せ、続く 5 月 6 日号では、「青年文化会議では 4 月 30 日例会の席上、東宝問題をとりあげ、従組側から楠田清、小田基義〔最後の漢字不鮮明〕氏の出席を得て本問題について懇談した結果本問題を文化の危機として全面的に組合側を支持する旨の声明書を発表した」と伝えている。この「声明書」は発見されていないが、同号に掲載された議長・中村哲の「バーバリズムとの闘い 東宝問題とアカデミズム」と題する寄稿文は、この青年文化会議の声明書と大きな齟齬はないものと思われる。

東宝問題は、中村によれば、一会社の労働争議ではなく、「戦後の文化・労働・政治の問題が集約的に表現されている興味ある事件」であり、経営的にみれば、東宝を芸術映画の生産体から興業体に移行させるために、外資を導入する企てであり、文化的にみれば、「都市の知識階級」から「美しいに日本映画」を奪って、代わりに外国映画を上映し、「外国映画の判らない農村青年や街のあんちゃん」のためにエログロ映画をそえて「遅れた観客」に媚びようとするものである。そして政治的にみれば、この独占資本、金融資本の攻勢によって、「進歩的な産業資本家を含む民主戦線の結成が、いよいよ可能となり、人民的民主主義革命のための戦線統一の絶好の条件が提出され」ているのである。それゆえ東宝の労働組合を支援する共産党に対しては、「労働組合と一般の労働者、小市民、ことに知識階級との連携」役を果たすために、東宝問題を党派的利害から利用しないよう自重を求めているが、共産党の「現在の指導者にどれほど期待してよいのか」と疑念も隠していない。こうした中村の問題認識と政治姿勢、さらには共産党指導部へのスタンスが、運営委員である内田義彦のものでもあるのかどうかは判らない。しかし先にも述べたように、この時期の内田は大学新聞の載せた文や書評で、次第に政治的テーマを前面に出すようになっていた。このことは、東宝問題でも議長の中村と運営委員の内田とのあいだに認識

の大きな差違がなかったと推測する材料となるが、それを直截に裏づける内田側の資料はない。農村青年や街のあんちゃんを「遅れた」観客とする中村の青年感あるいは庶民感を内田も共有していたかどうかは、また別の問題である。

第二次青年文化会議の活動を伝える記事は、この東宝争議に関するものだけである。そのことは、政治への傾斜という第二次青年文化会議の性格を表している。新発足にあたって明らかにした関西支部の設置、公開講座、研究発表会の開催という方針が実施に移されたのかどうかは、一切不明である。機関紙も発行されなかったようである。そしていつ活動を終えたのかもはっきりしない。

青年文化会議は、1945年10月の準備開始から数えても2年半余りという比較的短い活動をもって終焉を迎えた。オールド・リベラリストとの決別を宣して出発した会員たちは、決別すべき古い自由主義から思想的に脱皮できたのだろうか、いいかえればマルクス主義と一線を画する新しいタイプの自由主義を構築できたのだろうか。⁴⁸⁾そこには大きなアポリアがあったように思われる。オールド・リベラリストとの決別を意識すればするほど、かれら（の一部）は古い自由主義の代替物をマルクス主義に見出していった。そのことは自由主義の思想的独自性を曖昧にすることであった。他方で新しい自由主義を作りあげようとするれば、古い自由主義だけでなくマルクス主義との違いも明確にしなければならなかった。マルクス主義への傾斜とそれとの差異化という難題は、第一次青年文化会議を一年をみずに事実上の活動停止に追い込んでしまった。第二次青年文化会議は前者に比重をおくことで活動の再生をはかろうとしたが、それをもってしても、新しい自由主義によって「民主主義の軌道」を拓くというこの集団の最大目標には繋がらなかったように思われる。（未完）

48) 丸山や久野収によれば、終戦直後には、安倍能成、田中耕太郎などオールド・リベラリストや、後に保守的な立場にたった福田恆存も「過去からの根本的変革」が必要だという点で、共通の気分や認識をもっていたというから、青年文化会議のオールド・リベラリストとの決別方針も、運動論として課題を抱えていたというべきであろう。石田雄・久野収・坂本義和・日高六郎・丸山眞男・緑川亨・吉野源三郎「(座談会)『平和問題談話会』について」『世界』1985年7月臨時増刊号、『丸山眞男座談9』岩波書店、1998年収録、143-144ページ。